

自閉症者のパニックについての一考察 —自閉症者たちの表現活動を中心に—

話題提供者： 高原 朗子（長崎大学）
 黒田 純子（京都市立西賀茂中学校）
 折笠 美穂（京都女子大学）
 指定討論者： 楠 峰光（西日本短期大学）

企画者： 高木 徳子（京都女子大学）
 司会者： 高木 徳子（京都女子大学）

【企画の趣旨】

自閉症の一番大きな障害は、人とのかかわりのまずさにある。それをかたちづくっている一つにパニックがある。

このパニックのために、多くの一般の人はパニックを起こしている時の自閉症児・者には近付いてはくれないし、パニックを起こすことがわかっている彼らにはできるだけかかわらないでおこうとする。親たちもパニックを家の中で起こされたら近所の人たちに迷惑をかける事を恐れパニックを起こさないように子どもの言うことをどんな事でも受け入れ子どもの我儘を助長させてしまっている。そのため、子どものパニックは子どもと共に大きくなり、親の手に負えないようになってしまう。その時に私達は何ができるだろうか。

そこで、彼らの欲求不満を解消させ、思う存分思いを発散させることを試み、パニック軽減をみることができた3つの方法を紹介する。

その方法は、

- 1 心理劇
- 2 演劇を作成して演じる
- 3 Eメールによる通信

である。

1、2は、学校という教育の場では、教員の指導のもと「一つの劇」を作り上げていく過程で、自己表現をし欲求不満を発散させていた。卒業後、その表現の場を失ったため、その場を作つてやることで、自分の思いを表現できる満足感・充足感が得られ、パニックを引き起こす要因があっても、自分の中で処理することができるようになった。

3は、初めは自分で判断できにくいこと、例えば「A、B、Cのどれにするか」というようなことの判断を母親に求めるものであった。しかし、次第に、自分の気持ちのイライラをメールに打ち込むことで解消できるようになり、また、楽しい気持ちを他者にEメールで伝えることができるようになると共に、表出言語としても表せるようになった。

【話題提供】

自閉性障害児・者の

心理劇体験にみられる表現活動

高原朗子（長崎大学）

【心理劇の目的】自閉性障害児・者は知的障害の有無によらず、他者と気持ちを共有することや、自分自身の思いを表現することに困難を生じ、パニック等の不適応行動も、そのようなストレスフルな状況で生じることも多い。この問題を改善するために、自我を強化し、表現力を高め、社会適応力を高めることは必要不可欠であると思われる。発表者は集団精神療法の一つである心理劇を年長から成人の自閉性障害児・者に対して10年にわたり施行し、他者との安心した関係作りと、それに伴う個々人の感情表出の促進を目指してきた（高原1993、1995、2000他）。

【心理劇施行の経過とルール】施行当初はレクリエーション的要素の強い内容でグループ作りを行い、その後、言語レベルや知的レベルに従っていくつかのグループに分け心理劇を施行してきた。ルールとして、1) 心理劇への参加は対象者の意思を尊重する、2) 劇中に出てきたプライバシーに関わる内容は原則として秘密厳守する、3) 対象者、スタッフともに劇場面では「～さん」付けで呼び合う、を定めている。

【事例】シンポジウム当日にDSM-IVにおける自閉性障害もしくはアスペルガー障害の診断基準を満たしており、知的障害（以下MR）の各レベルに応じた事例を複数紹介する。

【まとめ】心理劇場面は非現実の場であるが、心理体験としては現実的な生々しい体験を味わうことができるといわれている（針塚1996他）。このことは自閉性障害児・者にとってもあてはまり、日常生活ではなかなか体験させることが難しい情動体験を得るのに効果的であった。また、知的障害の各レベルに応じた援助の必要性が認められた、有効な援助がなされると対象者は自身の思いをかなり適切に表現できることがわかった。さらに、

自身の気持ちを表現することやまわりのシェアリングによって、パニックを含めた不適切行動が改善されることが示された。

自閉性障害者と知的障害者のリズム体操と表現

黒田純子（京都市立西賀茂中学校）

〔リズム体操と表現施行の目的〕自閉性障害者や知的障害者は、緊張の強すぎる人や、弛緩の強い人など、自己身体に対するボディイメージと運動能力の調整力の弱さから、思うように自由に身体を動かすことが苦手である。それは、学校に在籍中は体育などの授業で様々な運動を通して補われてきたが、卒業してからは身体活動の場が少なくなってきたり音楽の時間に行なわれてきたような大きな声を出したり大きな声で歌ったりして、自己を発散する機会もますます少なくなっている。大きな声で歌ったり、楽しい曲に合わせて体を動かすことは、自己の内面にあるエネルギーを体や声をとおして外部に発散でき、ストレスやパニックから解放されやすい状態をつくると思われる。

発表者は自閉性障害者と知的障害者に対して平成10年度から月1回京都女子大学において、色々な曲を使って、顔の表情を意識的に変化させたり、身体の部分的な緊張と緩和、手と脚のバランス、他者と関わりながら踊るなどを織り交ぜた全身運動としてリズム体操やダンスを施行してきた。より自由にリズムカルに自己の身体を動かし、他者を意識しコミュニケーションをとり、内面にあるエネルギーを楽しい気分で表出することで、より安定した心理状態を形成していき、パニックや不適応行動を軽減できる力を培うよう目指してきた。

〔リズム体操と表現の経過〕施行当初は動きはぎこちなく表情も少なく指導者の模倣もうまくできなかったが、だんだん曲に気分がのってきた感じが見られ動きの模倣も比較的うまくできるようになってきた。そしてそれぞれが自ら楽しんで動けるようになってきた。毎月のリズム体操やダンスをより発展させ、京都女子大学の学生の1対1の支援のもとで、「西遊記」をテーマに音刺激・動作刺激を含めたオペレッタを自閉症者や知的障害者と共に創作し、彼らの発表の場をもつことができた。

〔まとめ〕模倣の動きを中心としたリズム体操や二人組の動きから発展させ、自分のイメージをもちそのイメージを動きや踊りで表現したり大きな声で台詞や歌を歌うことで、他者を意識しコミュニケーションの改善の一助になったことが示された。

高機能自閉症者のコミュニケーションにおける

Eメール導入の有効性—事例Kをとおして—

折笠美穂（京都女子大学）

高機能自閉症者は、青年期以降、学校という保護された世界から一般社会に出た時に、強いこだわりやパニック等の問題行動のために、就労ができなかったり続かない等、社会人として生きていくのに深刻な問題に直面している。彼らが、基本的な生活習慣を身につけ、日常的なことを一通り自分でこなすことが可能となっても、パニック行動を持ち続けたり、細部でのコミュニケーション能力・対人関係のまずさのために抱える課題はまだ多い。そこで、そのような彼らのコミュニケーション・対人関係のひろがりを助けると共に、パニックの軽減に対して有効なEメールによるコミュニケーションの導入について、ある事例をとおして紹介する。

〔事例対象〕高機能自閉症者（WISC-R:128）26歳男性、共同作業所通所。（以下Kとする）

Kと発表者とのかわり目は今年で7年目になる。Eメールによるコミュニケーションを始めた1999年6月から2000年11月の1年半には、Kと発表者との間に、84通のEメールのやりとりがあった。KのEメールの内容は、一般的伝達に始まり、その後、トラブルを訴えたり、楽しい出来事を報告するものへとひろがり「～をしましょう。～に行くのはどうですか。」と誘いかけるメールもみられるようになっていく。

これまで、Kにみられている変化を大きくまとめると次の3つのことがあげられる。

- 1 Kの思い・感情等、内面の言語化と伝達
- 2 日常場面も含めたKからの働きかけの増加
- 3 パニックの言語化・伝達とその軽減

シンポジウム当日には、Kの家族構成、生育歴及びパニック歴、Eメールの内容についても抜粋しながら、上記の各項目の詳細を紹介する。